畏敬と未来へのランドアート

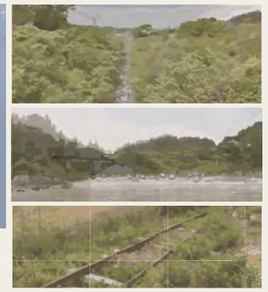
メモリアルプレイスにおいて、継承するべき“記憶”とは何か。

丹下健三による広島平和記念資料館は、第二次世界大戦という繰り返してはならない“人類の戦争という負の歴史”を記憶している。ならば、東日本大震災において記憶すべき事は何か？

それは、“自然への畏敬の念”ではないかと我々は考える。

未来の生態系の為の場は、現在的には人々に畏敬の念を抱かせるランドアートとして機能する

1 SITE 敷地：本吉町前浜・天ヶ沢・田の沢



■敷地は本吉町前浜・天ケ沢の一体である。リアス式海岸特有の崖や山、漁港が揃った、気仙沼を典型とも言えるこの敷地では日本の典型とも言える人口減少問題も抱えている。

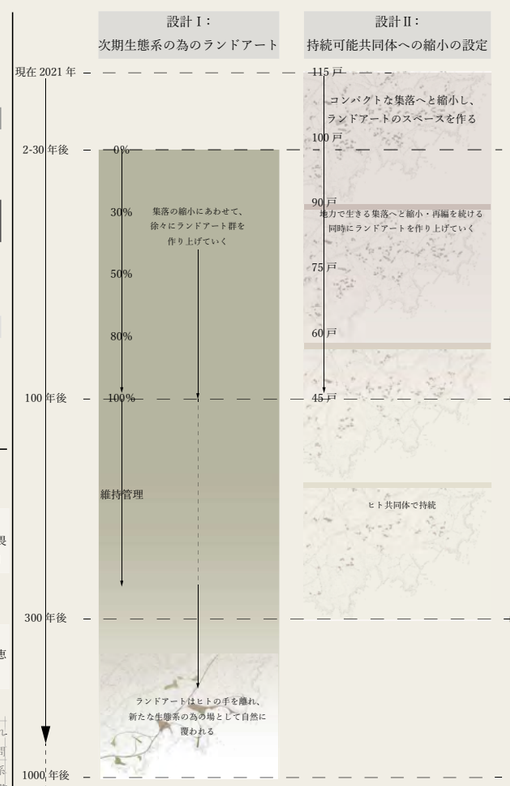
■自然災害によって、本来の機能を失い形骸化した JR 気仙沼線廃線に我々は畏敬の念を覚えた。その計り知れない自然のダイナミクスに。この体験を再生産し、語り継ぐ事こそがメモリアルプレイスとして求められている事なのではないか

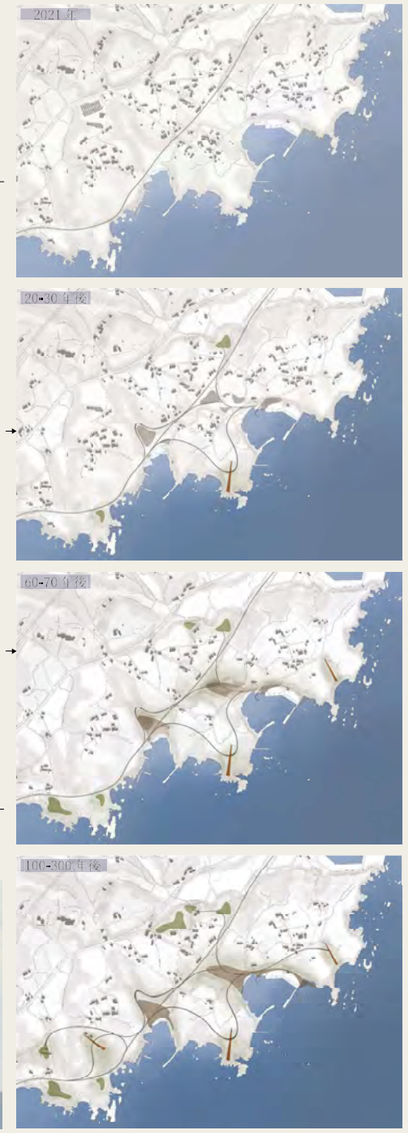
2 CONCEPT 継承すべき記憶とは“自然への畏敬の念”である

■メモリアルプレイスにおいて、継承するべき“記憶”とは何か。丹下健三による広島平和記念資料館は、第二次世界大戦という繰り返してはならない“人類の戦争という負の歴史”を記憶している。
ならば、東日本大震災において継承すべき記憶とは何か？

それは、“自然への畏敬の念”ではないかと我々は考える。
人々に畏敬の念を植え付け、後世に受け継ぐ為にランドアートのような未来生態系の場を設計し、そしてそれらを持続させるコミュニティーの形成を設定を行う。

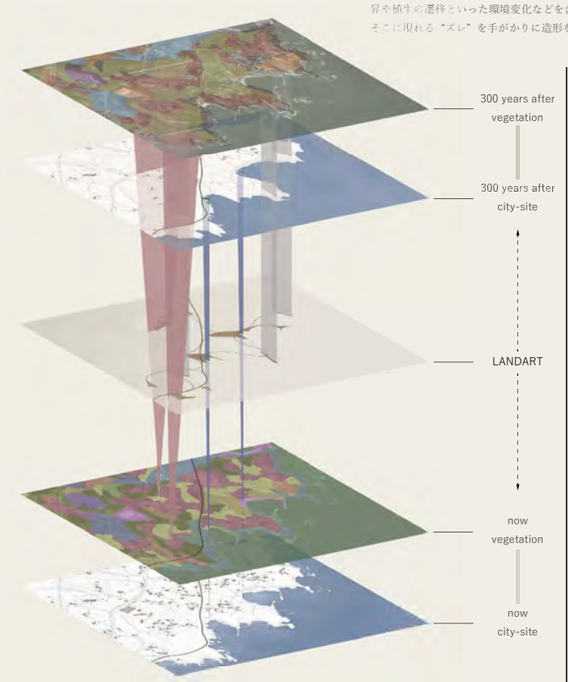
3 PROCESS 未来へのランドアート / 共同体のタイムライン



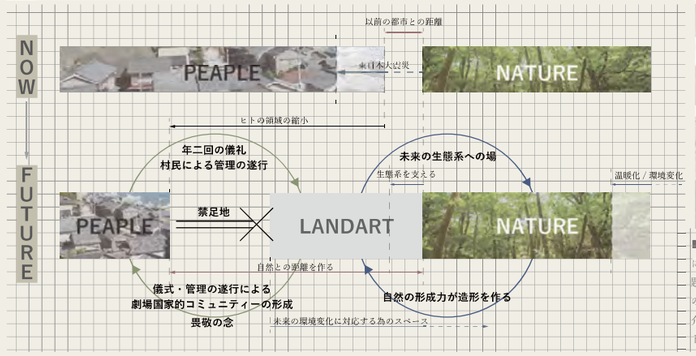


4 DIAGRAM 「300 年後の地図」と「今の地図」とのズレを埋めるランドアート

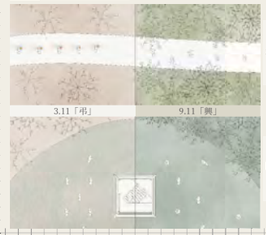
■ランドアートは 300 年後の生態系を見据えて設計を行った。人口減少や温暖化による海面上昇や植生の遷移といった環境変化などを含めた「300 年後の地図」を作り、現在の地図にかぶせる。そこに現れる“ズレ”を手がかりに造形を行う事で、未来生態系に寄与するスペースを創る



5 RELATIONSHIP 儀礼と管理を通して形成される劇場国家的コミュニティー



6 RITUAL 半年毎に年二回行われる儀礼 / 祭



■ 3.11「弔」
被災者を弔い、自然への畏敬の念が最大化される日

半年毎の祭事が
ハレとケを生む

■ 9.11「興」
時の流れを感じ、自然の恵みへの感謝する日

■東日本大震災により、自然に対するヒトの圧倒的優位性は揺るがされた。それに伴い、ここ気仙沼ではヒトと自然の距離が急速は出来てしまった。人口減少問題も含め、ヒトの活動領域が縮小していく中、その縮小した領域を未来の生態系の為のランドアートへと変換していく。ヒトと自然の間にランドアートという媒介が入る事によって、ヒトはランドアートを通して自然を感じ、また自然はランドアートにより環境変化に対応する。

7 SECTION-SCENERY

■3 月 11 日は弔い、9 月 11 日は興す、1 年のなかに 2 つのハレとケともいえる祭事が行われる。この年 2 回の祭事の際にヒトは禁足地に足を踏み入れ、自然と戯れる。

scale=1/30000

8 SITE-PLAN　廃線を基軸に展開するランドアート群

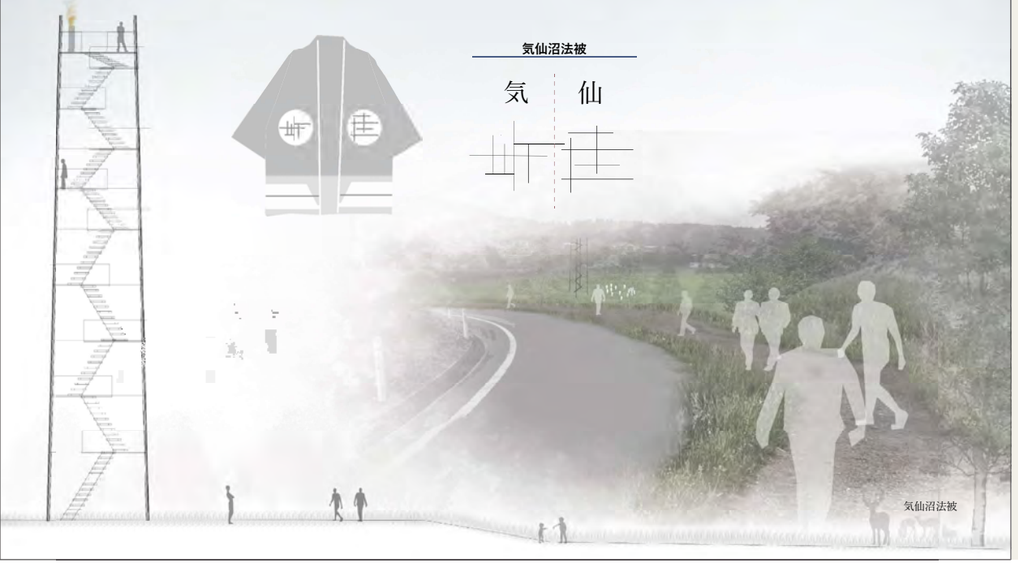
廃線を軸として、パスが各々のランドアートへと伸びていく計画とした。リアス式海岸において、横向きの繋がりを感じられることは集落にとってとても重要なことであり、廃線はその機能を担保している。つまり廃線跡を基軸とすることで東西へとランドアート群が広がることのできる構成とした

9 DIAGURAM　ヒト用地を未来生態系の場へとランドアートを介して変換 / 返還する

急速な環境変化に未来の生態系が対応するための場をつくる。現在的にはランドアートであるが、長い年月を経て自然の一部となる。温暖化による植生の北上には空き地が受け皿として対応し、海面上昇は砂浜がビーチとして吸収する。さらに谷は、将来絶滅の危惧がある種の多いコウモリ・鳥類の住処として使われていくだろう

10 SECTION-SCENERY　広大なランドアートとヒトを繋ぐパス・工作物から生まれる文化

広大なスケールで造形されているランドアートとヒトとが接する部分には、そのズレたスケールを繋ぎ、そこで新たに文化が生まれる土壌となるものを設計した。空地の誕生により生まれた見晴らしの良い場所には塔を配し、各儀礼の際にはここを起点に弔いや祭りの場がつくられる。さらに、各ランドアート同士を繋ぐパスは、既存の道に沿いながらも、あぜ道の様な佇まいで集落の中を貫通する。儀礼の際に人はここを通り、日常的にも使われる。既存の都市骨格と未来の骨格のズレが文化を生む。



11 PLAN/SECTION　人が減り、自然が拡大するタイムライン（2,30 年 /100 年 /1000 年）

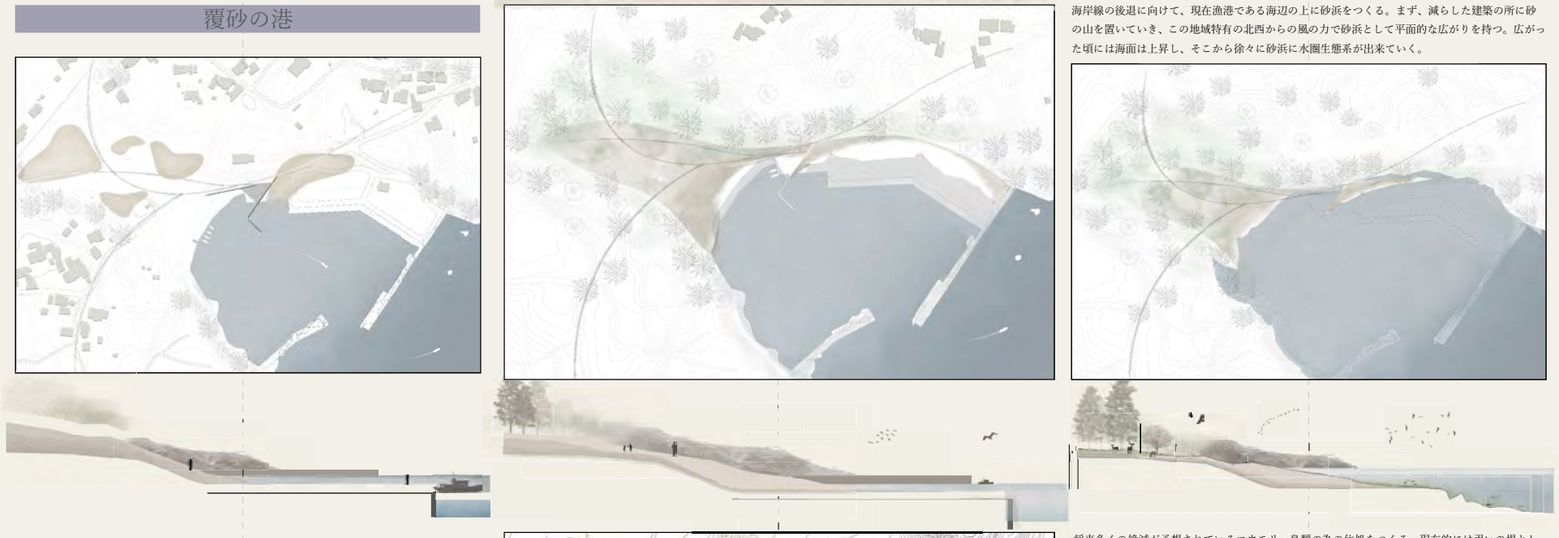
20-50年　100-300年　700-1000年

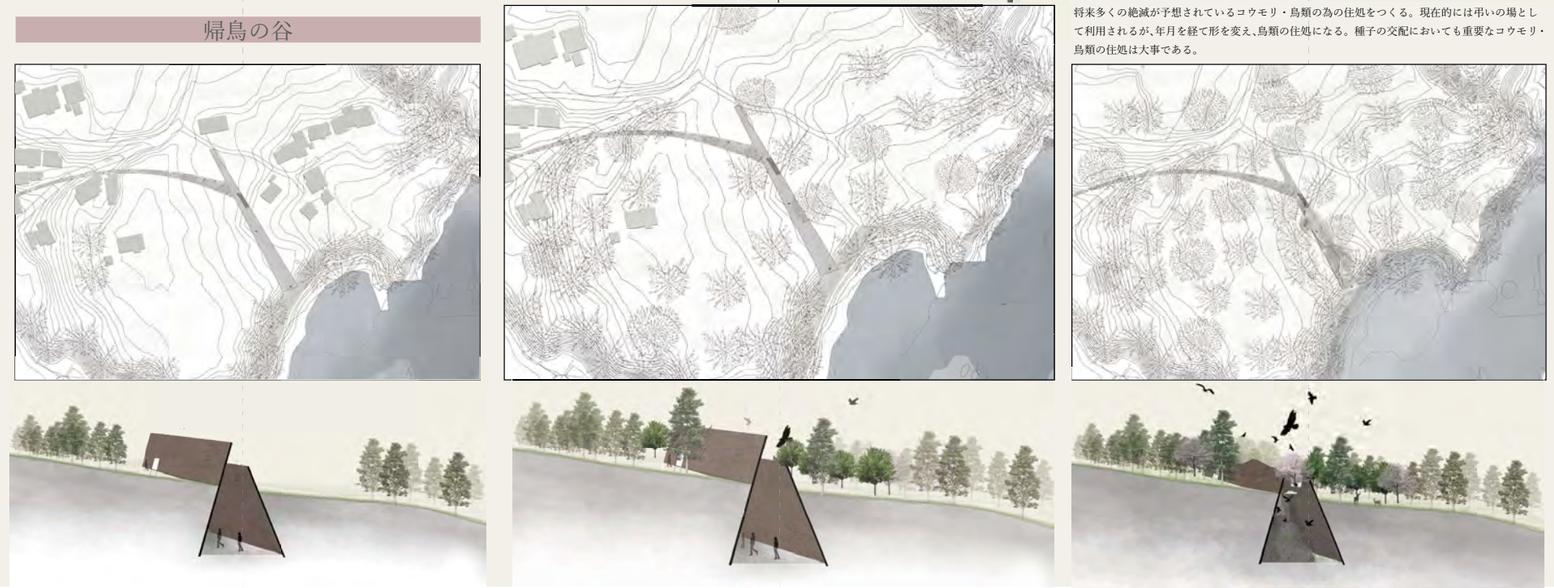
後森の空地

集落を縮小するにあたって、現在は建築が建っている所を未来の植生の為のブランクスペースとしてデザインした。建築の減少に合わせて範囲を増やしていく。普段は禁足地であるが祭事では広場として使われる。

覆砂の港

海岸線の後退に向けて、現在漁港である海辺の上に砂浜をつくる。まず、減らした建築の所に砂の山を置いていき、この地域特有の北西からの風の力で砂浜として平面的な広がりを持つ。広がった頃には海面は上昇し、そこから徐々に砂浜に水圏生態系が出来ていく。



帰鳥の谷

将来多くの絶滅が予想されているコウモリ・鳥類の為の住処をつくる。現在的には弔いの場として利用されるが、年月を経て形を変え、鳥類の住処になる。種子の交配においても重要なコウモリ・鳥類の住処は大事である。